

修了生の諸君へ

餞辞



まずもって、修士課程修了、学位取得に対して、おめでとうと祝意を申し上げます。

この2年間、いくつもの困難を乗り越え克服して立派な修士論文を完成させ、今日めでたく学位取得にいたった皆さんの努力と学術探究への真摯な精神に敬意を表します。

在学中、幾多の困難に直面し、自分の力のなさに悩み、自信を失ったこともあったでしょう。そんな紆余曲折の中、挫けそうになりながらなお踏み止まり、自分を信じて研究を貫いてきたからこそ、論文は完成に到ったのです。

また、在学中、楽しいことも辛いことも、院生室で一緒に過ごした仲間との間で培われた絆は、知らず知らずの中に相当強いものとなったことでしょう。中にはご家族の不幸に遭遇し、直ちに帰ることもままならず悲しみの底に一人沈んでいた時、同じ仲間が悲しみを共有してくれ、それにどれほど勇気づけられたことでしょう。

今皆さんは学舎を離れ、教員としてあるいは実業人、公務員として巣立っていきます。皆さんの母校文教大学大学院言語文化研究科は、開設以来20年間で220名ほどの人材を世に送り出してきました。しかしながら、日本国内においても、広く海外においても、超有名校となるにはまだまだ時間がかかりそうです。一昨年来輩出してきた博士号取得者からは、まだネームバリューが高くないので、評価を得るのに苦労するとの声も聞こえます。

しかし、文教大学言語文化研究科が高く評価されるもされないも、これは偏に修了して学位を得た皆さんのこれからの活躍、奮闘の如何にかかっているのです。また、文教大学言語文化研究科が、素晴らしい研究と学びの場であったかどうかは、これから皆さんが学舎を離れてそれぞれの場で活躍することによってのみ立証されるのです。

その昔、John F. Kennedy は1961年1月20日に米国第35代大統領に就任した際の演説でこう述べています。“My fellow Americans; ask not what your country can do for you--ask what you can do for your country.”

これと同じことを、皆さんにも求めたいと思います。言語文化研究科は、これからもより高い研究を究め、より優れた人材を輩出し続け、それによって皆さんの後ろ盾となり続けます。しかしそれよりも重要なことは、あなた方が母校のために何をなし得てくれるかなのです。言語文化研究科の将来の評価と名声は、修了生の皆さんとともに勝ち取り、築き上げられていくものと信じます。

皆さんの奮闘、活躍に期待します。

2020年3月16日

文教大学大学院言語文化研究科長

伊井啓介